

外貨準備の通貨構成から見えること

2014年第四四半期の世界の外貨準備の通貨構成の統計が、IMFにより昨日アップデートされた。この統計から読み取れる点を挙げる。

1. ドルの比率が前期（Q3）に続き増加した。ドルの比率は Q3 に増加に転じたが、その傾向が継続し、62.9%になった。この傾向は先進国、新興国共に見られるが、特に新興国で顕著だ。一時60%を切った新興国のドル離れに歯止めがかかった可能性もある。

2. 前期（Q3）に著しく減少したユーロの比率は、今回（Q4）もさらに減少傾向が見え、22.2%になった。この傾向は新興国に著しい。

3. 外貨準備総額が減少した。先進国は増加したが新興国の減少額が大きいためだ。通貨安防衛のためのドル売り介入やドル高による評価減が外貨準備減少の要因と考えられる。外貨準備総額はピークの Q2 から3.2%減少した。

4. ドル、ユーロ以外の通貨の比率にはほとんど変化がない。

5. 円の比率は4%だが、量的緩和で円安が進行している間もほとんど変化がなかった。つまり円の金額は実質的に増加している。円の信頼性に陰りはない。

以下は、以上の点を踏まえての推論だが、

6. 昨年第三四半期に大きな地殻変動が起きた可能性があることだ。それはドルの復権とユーロの衰退、それに外貨準備減少に見られる新興国パワーの弱体化、あるいは選別化の進行が始まった。

7. こうした中長期のトレンドを短期の投機為替が増幅させ、大幅なドルロング、ユーロショートポジションが市場で形成された。今年になってそうした短期のポジション調整が発生したが、中長期的にはドル高ユーロ安のトレンドは続くと見られる。